

## 番組審議会議事録（第5回、平成27年2月16日開催）

1 開催年月日：平成27年2月16日（月）

2 開催場所：私学会館 アルカディア市ヶ谷（5F 赤城）

3 委員出席

委員総数 9名

出席委員数 9名

出席委員の氏名：岡田裕介（東映株式会社 代表取締役グループ会長）、

足立盛二郎（公益財団法人 日本棋院理事、

元ゆうちょ銀行取締役兼代表執行役会長・日本郵政取締役）、

兵頭俊夫（大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構

物質構造化学研究所特別教授）、

野田慶人（日本大学芸術学部 学部長）

音 好宏（上智大学 文学部 新聞学科 教授）、

中村幸雄（損保ジャパン日本興亜株式会社 顧問、

元株式会社損保ジャパン 代表取締役専務・監査役）、

金子光男（公益社団法人日本将棋連盟 学校教育アドバイザー 大学担当

明治大学付属明治高等学校・中学校 前校長）、

小川誠子（囲碁棋士／公益財団法人日本棋院 理事）、

清水市代（将棋女流棋士）

放送事業者側出席者名：岡本光正代表取締役社長、遠藤 健業務部課長、

高田智子、張 慧娟

4 議題

- ・生放送・特集について
- ・その他の事業について
- ・ここ半年、そして今後の番組や活動などについて

5 議事の概要

(1) 生放送（囲碁「第1回 日中竜星戦」、将棋「第64期 王将戦挑戦者決定プレーオフ」）、

囲碁スペシャル「空前の棋士 呉 清源」、囲碁 幽玄の間 presents 「由香里先生と一緒にネット碁デビュー！」

最近放送した番組の中から、生放送、スペシャル番組、入門講座を紹介。

(2) その他の事業について

番組の書籍化を紹介。

(3) ここ半年、そして今後の番組や活動などについて

会員制度導入や、記者養成に関して紹介。

## 6 審議内容

### (1) 生放送・特集について

→ 日中竜星戦に関して、中国で第6期が終わった。来年は中国開催で調整しているが、日本で開催する可能性もある。いずれにしても第2回、第3回と開催していこうと決めている。将棋の王将戦挑戦者決定プレーオフに関しては、ネットでも付随して対局開始から放送した。テレビ放送の方は冒頭から放送する時間が取れなかったもので、6時～8時まで放送、たまたま放送終了5分前くらいで対局が終わり丁度良かった。放送で、長い対局をどうやって放送するかという難しさがある。生放送はスポーツ的要素というのもあり、増やしていきたいと思っている。

囲碁スペシャルの方は呉 清源先生のような棋士に焦点を当てて、色々な形で番組を作り、人物の方から入っていくという番組をどんどん作っていきたい。作る順番は決めていないので、何かこういう人が良いのというご意見があればいただきたい。(放送事業者)

○資料で特番のコンセプトがわかりづらい。リストに中高年の方しか入っていないので、現役の先生のリアルな策定で作られるというところが肝にあるということか？

(兵頭委員)

→ はい。(放送事業者)

○記録映像も欲しい。別のシリーズと考えてもいいし、作り方は違うけど同じシリーズということでも良いと思う。(兵頭委員)

→ コンセプトをしっかりとやって、作りたいという風に思っている。(放送事業者)

○既に特番が出来ている方は何人か(兵頭委員)

→ 米長邦雄先生、加藤一二三先生、菊池康郎先生は制作した。続く特番候補ということで、現在、囲碁界、将棋界で活躍されている、今後囲碁界、将棋界の歴史残るであろう棋士の、現役の生き生きとした姿を残しておこう、という特集を組んで残していこうと考えている。(放送事業者)

### (2) その他の事業について(放送事業者より)

→ 番組「記憶の一局」の書籍化を予定している。4月に発行予定。今後も書籍化の企画を考えていきたい。(放送事業者)

### (3) ここ半年、そして今後の番組や活動などについて

→ 囲碁・将棋チャンネルは今年の8月1日で25周年を迎える。25周年経ったところで、インターネット等々で幅を広げていきたい。最近、写真はあっても映像資料が無いと感じている。これからはどんどん映像を撮って報道局を会社の中で作っていこうと考えている。ニギリとか振り駒とかのシーンをもっと世の中の人に見て欲しい、結果を含めた時に、映像があるのとないのでは全然違うと思う。囲碁・将棋それぞれ取材をもっと特化していきたいということが第一点。

第二点は、囲碁・将棋チャンネルの欠点は、囲碁と将棋を両方するという方はあまりいないので、プレーヤーによって放送を見る時間が限られている。それを何とかできないかということ。現状のプラットフォームのオンデマンドでそれをフォローしていく。放送と同じものを用意しておけば、囲碁の時間に将棋も見られる、というサービス向上をやっていききたい。

もう一点は、生放送が対局の冒頭から全部放送できない。そこで、ネットでフォローする会員制度を構築できればという風に思っている。これは8月1日を目標にやっている。会員になると、会員棋戦もできる、イベントもできる、放送にもリンクしますけど、付随したところに進出していききたいという風に考えている。放送だけで全部取材したものとか出せないのも、通信も利用して更に広げていききたいという風に思っている。

出版も今度、番組と出版を連動してやっていこうとご提案もしている。放送から様々なところにリンクしていきながら、できるだけ良い映像を外へ出し、囲碁・将棋の普及を図りながら業績も上げていきたいと考えている。次回の番組審議会では具体的なお報告ができるという風に考えている。(放送事業者)

○ 収入源は何ですか？(岡田委員長)

→ 収入源は基本的には使用料収入が一番多いです。(放送事業者)

○ 増えているのか減っているのかってというのは？(岡田委員長)

→ 基本的には、当社が東北新社グループになってからこの12月で5年になるが、その時の1.5倍くらいにはなっている。一番大きい要因は110度に出たことが一番。今度は会員制度ができ、放送と違う事業になればという風に思っている。今ニコニコ動画で実験的にやっている。王将戦のプレーオフでは一気に会員数が増えた、会費は有料でやっている。(放送事業者)

○ スマホの9路盤、13路盤、無料のソフトというのが今人気になっているらしい。広がるとこちらにも良い影響があるのでは。(兵頭委員)

○ 数年前と比べて、最近是中国棋院の放送を始めたので、同じ囲碁であっても、国によって、ものの考え方が違うというのがいっぱいあった、それを分かることが囲碁の一つの魅力を感じていると思う。(足立委員)

○ 生放送が登場したことが、従来は過去の棋譜を紹介することや、詰碁の番組を流すなどのやや無機質的なものが、人間の生の生き方と非常に関わっているということを感じているので、また幅が広がってきたような気がする。今後はやっぱり生放送的な報道番組のようなものを一層工夫されるのは非常に良いと思う。(足立委員)

○ お好み置碁道場というのがあるが、碁というよりも囲碁を通じて人生を歩んできた人々を紹介というような点が見ている人にとって面白いのではないかと。碁そ

のもののゲームとしての面白さではなく、囲碁を人生の友として歩んできた人たちがどういう風に活躍をしているのかを伝えるところも番組の魅力だと思う。生きた人間、生きた社会と囲碁との関わりを取り上げていくということは、囲碁・将棋チャンネルのこれからの魅力を増やすことになると思う。(足立委員)

- 将棋と囲碁では番組の裏側にあるファンの広がりというのは開きがあるのか？(金子委員)

→ ネットは、将棋の方が大きいとは思いますが。8:2(将棋:囲碁)くらいです。将棋の方が多い。ただ、視聴率を見ると、囲碁の方が高い。レジャー白書では、その時に将棋が1200万、囲碁が630万となっていた。

対局は視聴率が高い。竜星戦、銀河戦、女流王将戦が高い。視聴者の声として中国竜星戦はコメントに対して面白いというのが多い。(放送事業者)

- 視聴者の中で、年齢層だとか男女比などは分析できないのですか？(中村委員)

→ 基本的には視聴率では男女比は分析できない、接触調査のようなものはあり、アンケートを取っている、それでは高齢の男性が高い。(放送事業者)

- 全般的に将棋の方を見ると新聞やドラマも含めて、おじいちゃんが将棋を指している場面が出たりしているのが、増えているような気がする。視聴者の層は、我々の年代だと将棋は今でも趣味としている人が多いが、時間が取れない方も番組をビデオで録ったり、弱いけれども必ず見るといふ方も聞いていると多い。その他に将棋を指さないが、なんか面白いというのもある。見ていると、制作の作り方、ターゲットをどの辺に絞るかというのも今後の課題になっていくのではないか。女性や子供など。学校への放送普及は、教育状況が分かれば、これから作っていくのに何か手があるのではないか。(中村委員)

→ 様々な番組をどのターゲット層にやっていくかというのは、付帯サービスのところでは使いやすいと思っている。オンデマンドは視聴者が番組を選べるので付帯サービスの方ではそういうサービスを付加していく手はあると。基本的には録画している人が増加している現実がある。面白い例としては、J:COMさんが加入者にタブレットを配っている。今後はテレビだけではなく、タブレット類で見られるようにしていきたい。(放送事業者)

- タブレットなどで見る事が出来たらすごく良いと思う。昔は電車に乗って新聞で囲碁の部分とか将棋の部分を見ている人がすごく多かったと思うが、同じような形で見れるとすごく良いと。それもリアルで、と思う。(音委員)

- (囲碁・将棋チャンネルは)頑張っていると思う。一生懸命色んな試みをやって、大変に良いチャンネルに変わっていると思っている。今後は、囲碁にしても将棋にしても、初心者が見るかどうかをよく検討していかないといけない。やりたい人にルールを教えることと、視聴率を上げるっていうことは、必ずしも一体化しない。ネットを使ったり、色んなことをして、どう誘導していくか。

解説する人たちの人選、解説するレベルも大事な話になると思う。見ている方は素人なので、素人に対してどの辺のレベルでやっていくか。番組が始める前に解説者との打ち合わせをしておくことを繰り返すことによって、良くなっていくのではないか。他の番組との差別化になったりする。誰に対してやっているかっていうのを今後考えていかないといけないのではないか。ルールを覚えたい人と、何級かの人と、何段くらいの人までなど、ターゲットを含めて、きちっとしておかないといけないのではないか。(岡田委員長)

- 新しい視点ですね。素人で色んなレベルの人が集まって何かやりますね。その時の気持ち。高段者が言っていることじゃよく分からないが、そこから学びながら、何を学んでいるか分からないながらも見ていたり、同レベルだとアレ打ってくる、レベル違う人だったらこう打てば良いのにと思いながら見る。そのうちの高段者の目線で見ている気持ちのような感じの解説というのは今までにないし。実際作るのは大変かもしれないけど、新しく面白いかなどは思う。(兵頭委員)
  - そういうことができる解説者ばかりを選ぶというわけではなく、解説者も色々な人がいて良いと思う。反省会で、次はちょっと控えていただいた方がいいんじゃないですかということが言える場を作っていくべきではないかと思う。(岡田委員長)
  - 全く新しい視点なので、リスクもあると思うが、少しずつ工夫されると面白いかと思う。(兵頭委員)
  - ソフトを作る側の立場では、題材が人生だったりするから、初めて見る人も良くわかるように。みんなが見て、ちょっと見てみようかという感じにはならないと思う。もう少しナレーションを人懐っこくしてというような言い方まで出来るように。それから王将戦プレーオフは全部見たかったらネットで見なさいというだけでなく、手はかかるが、放送のどこかで番組放送前の状況を入れるといいと思う。だいぶ分かり易くなるかもしれない。(野田委員)
- とり入れるだけとり入れてやって行きます。(放送事業者)
- 解説の話に戻るが、プロ同士の対局の時に先にコンピュータの評価値が出たりする、ニコニコ動画でどちらが優勢だとか。評価値を見ながら解説しているプロの先生が、コンピュータが言っているのだからこちらが正しいのではというような先生と、いやコンピュータはそんなこと言っているけれど違うのでは？ というような先生が気になりまして。プロの先生がなにコンピュータ言っているの、違うよ、っていうのが、将棋を知っていようが知っていなかるうが、非常に良い感じを受ける。そういう面でプライドの高いプロの姿をもっと盛り込めると面白いのかなと、見ていて一つ。

もう一つは、コンピュータを開発した方が、プロとコンピュータとの対局が番組で流れた時に、プロの姿ばかり見ている。その時にしゃべった言葉がプロが本気

になりましたねって言った。本気になった時の姿をコンピュータを開発した方々が見ているというのを語っていたので、おっと思ったことがあった。少しでもそういうプロの本気の姿が、流せると良いと思った。(中村委員)

→ 女流棋士の対局を昨年 4K で放送した。通常の高ビジョンの 4 倍なので、通常の放送より迫力があつた。余談ですが、画面が 4 つに割れて上下全部できるってメリットもあるので、実験的にやれた。棋士を扱う撮り方を含めて、研究の余地はあるという風には思っている。現在の番組は撮り方が似ているので改良しなければならないと思っている。対局室も同じ場所で収録しているので似てしまう。改良の余地はある。(放送事業者)

以上